

仏神宗仏神寺柳山神社

神道祓いの儀

高皇產靈大御神

天之御中主大御神

神皇產靈大御神

瓊瓊杵尊

天照大御神

柳山大山祇大山神

不動明王

大日如來

遍照金剛

[illegible]

主祭神仏宝号

第一節 神道弘いの儀	勤行	一
清祓式開場祝辭祝詞（きよはらいしきかいじょうしゅくじのりと）		二
修祓の儀（しゅばつのぎ）		二
開始始祈念（かいしきねん）		三
降神の儀（こうしんのぎ）		四
産土神降神の儀（うぶすながみこうしんのぎ）		六
大元造化三神報恩之祝詞『現代語訳』		七
大元造化三神報恩之祝詞（だいげんぞうかさんじんほうおんののりと）		七
産土神祓祝詞（うぶすなのかみのほらいのりと）		九
天津祝詞（あまつのりと）		十一
祓祝詞（はらえのりと）		十二
祓祝詞（はらへのりと）		十三
大祓祝詞（おおはらいのりと）（6月30日・12月31日）		十五
（ホツマ伝え）天津祓（あまつはらえ）		二十
天津祓（あまつはらえ）		二十一
天津祓（あまつはらえ）		二十一
国津祓（くにつばらい）		二十二
蒼草祓（ひとあおぐさのほらい）		二十二
かたかむな 第五首〜第七首		二十三
発菩提心真言		二十七
三摩耶戒真言		二十七
光明真言		二十八
般若心経前文		二十九
仏説摩訶般若波羅蜜多心経延命十句観音経		三十
延命十句観音経前文		三十二
延命十句観音経		三十三
不動明王大咒		三十四
密厳院発露懺悔文		三十五
三力の偈		三十八
回向文		三十八
終祈念（きねん）		三十九
神前に捧げる御饌の種類		四十

第一節

神道祓いの儀

勤行

清祓式開場祝辞祝詞

(きよはらいしきかいじょうしゅくじのりと)

かけまくも かしこき はらひどの おおかみと たたえことを へまつる
 せおりつひめのかみ はやあきつひめのかみ いぶきどぬしのかみ
 はやさすらひめのかみ よはしらを はじめまつりて
 あまつかみ やおよろずくにのかみ やおよろずこれの はらひわざを
 たいらけく やすらけく きこしめせと かしこみ かしこみも まをす。

修祓の儀

(しゅばつのぎ)

はら ぐし
 祓い串で、かんけいしや
 関係者を祓い、かいじょうぜんたい
 会場全体を祓う。はら

▲記号が表示されていたら、光明真言を三遍復唱する事

かいしきねん

開始祈念

※別紙 記載あり

先ずは神様をお呼びする。

降神の儀（こうしんのぎ）

三拝 九拍手

※三拝九拍手（祈念）一拝は、最高神、天之御中主大御神様に捧げる最も良い数である、九は最高の数であるがゆえに、最高神を呼ぶのに最も良い数、九回の拍手打つ。

本当の御名前は、ミナカヌシ様ですが、アメノ、アマノは、総称です。

アメノミナカヌシオオミカミ、アマノミナカヌシオオミカミと呼ばれているが、どちらも正解の呼称であります。アマノミナカヌシオオミカミと唱えても、ミナカヌシと唱えても効果あり。

あまのみなかぬしおおみかみ

あまのみなかぬしおおみかみ

あまのみなかぬしおおみかみ

とゆつくり三回唱え、

み	み	み
な	な	な
か	か	か
ぬ	ぬ	ぬ
し	し	し

とゆっくり三回唱えて、唱えた後に、

○オーと、一息でゆっくり唱える。

○オーと、一息でゆっくり唱える。

○オーと、一息でゆっくり唱える。

一 拝

産土神降神の儀（うぶすながみこうしんのぎ）

二拝 二拍手

うぶすなのおおみかみ

とゆつくり三回唱え、唱えた後に、

○オーと、一息でゆつくり唱える。○オーと、一息でゆつくり唱える。○オーと、一息でゆつくり唱える。

一拝

大元造化三神報恩之祝詞『現代語訳』（だいげんぞうかさんじんほうおんののりと「げんだいごやく」）

言葉に掛けて、申し上げるのも、恐れ多い、天地根源の神様で在らせられる、天之御中主の大御神、高皇産靈の大御神、神皇産靈の大御神達の、不思議で絶妙な、御恩恵によって、この世に生まれ出てきた、我々の、身の上ならば、その御恩恵に、報い奉ろうとして、御称え、申し上げますには、いよいよ高く、底知れぬ、天上界の、幽界を、主宰され、始めもなく、終わりもなく、盤石に、永遠に、御鎮まりになられて、目には見えない、根源のエネルギーは、百種類に近い、神のエネルギーを、生じ給い、目に見えるものは、昼の世界、夜の世界を、主宰され、またこの地球にあっては、現代を、生きる人を始め、呼吸をする生き物も、呼吸をしない物も、この世に、ありとあらゆるものの限りを、生み出し給い、支配され、御守り下さり、幸をお与え下さる、ご功績の、偉大で、悠久で、広くて、厚い、大きな愛情を、蒙って、この現世に、生きている限りは、大御神様達の、元となる、御心そのままに、この真心を尽くさせて、頂いて、怠慢にならず、尊敬し、畏怖の気持ちで、お仕える様子を、御心も穏やかに、お聞き下さいまして、全世界の人々を、天地の神理に違わせず、開けた世の中に、後れることなく、さまざまな災難が無く、つつがなく、存在させて下さり、夜も、昼も、昼夜分けず、御守り、御恵み下さり、幸をお授け下さい、と、大空を、遙かに、拝ませて、頂きます、と、申し上げます。

大元造化三神報恩之祝詞（だいげんぞうかさんじんほうおんののりと）

※この祝詞は神前でも唱え、無形の空を仰ぎ奏上する祝詞です。

かけまくも いとも かしこき あめつちの もとつかみ

あまのみなかぬしのおおみかみ たかみむすびのおおみかみ

かむみむすびのおおみかみたちの くすしく たえなる

みたまの ふゆによりて この うつしよに あれいでたる みにし あれば

そのもとつ みめぐみに むくい たてまつらむとして

ただへごとを へまつらくは いやたかく そこひなき

たかまのはらの かくりよを しめ たまひ

はじめもなく おわりもなく ときはに かきはに しづまり まし まして

めにみえぬ もとつけは ももたらず やその かみけを なし たまひ

めにみゆるものは ひのみくに つきのみに ほしのみくに

またこれの おおつちに ありては

うつしき あおびとくさを はじめ いきあるも いきなきも よにありとし
あるものの かぎりを うむしいで うしはき まもり さきはえ たまえる
みいさおの おおき ひさしき ひろき あつき おおむ いくしみを
かがふりて このうつしよに あらむ かぎりは

おおみかみたちの もとつ みこころの まに まにに

この ころを つくして うむことなく

この みを つとめて おこたる ことなく

うやまひ かしこみも つかえまつる さまを たひらけく やすらけく

きこしめして よよのくにの あおびとくさをして

あめつちの かみわぎに たがは しめず ひらけ よにおくれ しめず

くさぐさの わざわいなく つつがなく あらしめ たまえ

よのまもり ひのまもりに まもり めぐみ さきはえ たまえと

みそら はるかに おろがみ まつらくと もおす。

産土神祓祝詞

(うぶすなのかみのはらいのりと)

かけまくも いとも かしこき あめつちの もとつかみ

あまのみなかぬしのおおみかみ たかみむすびのおおみかみ

かむみむすびのおおみかみ

かけまくも かしこき あまてらす おおみかみ うぶすなのおおかみ

ちんじゅのおおかみを はじめ

いとも ありがたき わがしゅごの ごそんざい たちの

おおまえを おろがみ まつりて かしこみ かしこみも まをさく

おおかみさま ぶっそん たちの

たかき とうとき こうみようを いつも いただき

ひろき あつき みたまのふゆと ごぶつとくを

うみの この いや つぎつぎに たまわり めぐみ たまひ

われは てんちしぜんの どおりにしたがい おかげさまの ところを もちて

われの じんせいを たいせつにして われとかぞくを ねぎらい

はげまし かんしゃして ところに えいようを あたえ

なりわいに はげみ てんしよくに ならしめ たまひ

わが いちれい しこんと ところが いや ますますに

せいちょうし ようじょうし ところがけ みすこやかに

よろづの ねがうこと かなえ たまひ

うぶすなの しんぶつは ゆうけん ちようわの しんぶつにて

うつしよを さりぬ のちは たかき れいかいに はいらしめ たまひ

じょうどへと みちびき たまひ

うつしよも かくりよも たのしみ よろびの かわる ことなく

みこころも なごやかに きこしめして まもり めぐみ さきはへ たまひ

いへかど たかく いやたかに いやひろに さかえしめ たまふ ことを

いんよう ちようわ された うつくしき だいしぜんの ちきゅう じんるいの

へいわ はってんの ために つくさしめ たまひ

もろもろの まがごと つみ けがれを

はらひ たまひ きよめ たまふと もおす ことの よしを

あまつかみ くにつかみ やおよろづの かみたたちと ともに

きこしめせと かしこみ かしこみも まをす

天津祝詞（あまつのりと）

たかまのはらに かむづまります

かむろぎ かむろみの みこと もちて

すめみ おやかむ いざなぎの みこと

つくしの ひむかの たちばなの おどの

あわぎはらに みそぎ はらひ たまふ ときに

あれませる はらへどの にじゅうろくしんの おおかみたち

もろもろの まがごと つみ けがれを

はらひ たまひ きよめ たまふと もおす ことの よしを

あまつかみ くにつかみ やおよろずの かみたちと ともに

あまの ふちごまの みみ ふりたてて

きこしめせと かしこみ かしこみ もおす。

※神前に立ち、祝詞を奏上する時、先ず二拝し、次の祓祝詞と神棚拝詞祝詞を奏上する。

祓祝詞（はらへのりと）

かけまくもかしこき いざなぎのおおかみ

つくしのひむかのたちばなのおどの

あわぎはらにみそぎはらひたまひしときに

なりませるはらへどのにじゅうろくしんの おおかみたち

もろもろの まがごと つみけがれ あらむをば

はらひ たまひ きよめ たまふと まをす ことを

きこしめせと かしこみ かしこみも もおす

※神前に立ち、祝詞を奏上する時、先ず二拝し、次の祓祝詞と神棚拝詞祝詞を奏上する。

祓祝詞（はらえのりと）

かけまくも かしこき いざなぎの おおかみ

つくしの ひむかの たちばなの おどの

あわぎはらに みそぎ はらひ たまふ ときに なりませる

※山吹色文字は、読まない、※黒文字だけ読むこと。

※衣服を脱いだ時に成った神々

※杖 つきたつ ふなとの かみ

※袋 ときおかしのかみ

※袴 ちまたのかみ

※左腕輪 おきざかるのかみ

※左腕輪 おきつかひべらの かみ

※右腕輪 へつなぎさびこの かみ

※潮流の中流で清めた時に、黄泉の国の穢れから成った神々

やそまが つひの かみ おおまが つひの かみ

※その禍を直すために成った神々

※帯 みちのながちはのかみ

※衣 わつらひのうしのかみ

※冠 あきぐひのうしのかみ

※左腕輪 おくつなぎさびこの かみ

※右腕輪 へざかるのかみ

※右腕輪 へつかひべらの かみ

かむな おひの かみ おおな おひの かみ いづの めの かみ

※潮流の底で清めた時に、成った神々（上記三神Ⅱ綿津見三神 下記三神Ⅱ住吉三神）

そこつ わたつみの かみ そこつ つのおの かみ

※潮流の中程で清めた時に、成った神々

なかつ わたつみの かみ なかつ つのおの みこと

※潮流の表面で清めた時に、成った神々

うわつ わたつみの かみ うわつ つのおの みこと

※最後に顔を洗った時に成った神々（三柱のうずのみこⅡ三貴子）※黙読する事。

※左目 あまてらす おおみかみ ※右目 つくよみの みこと

※鼻 たけはやすさのおの みこと

はらえど よはしらのかみたちと ともに もろもろの まがこと
 つみ けがれを はらひ たまひ きよめ たまふと もうす ことを
 きこしめせと かしこみ かしこみも もおす

大祓祝詞（中臣祓）

（おおはらいのりと（なかとみのおはらい））

※大祓いは節目節目で読むと良い祝詞です。（6月30日・12月31日）

たかまのはらに かみづまり まします

すめらがむつ かむろぎ かむろみの みことを もちて

やおよろづのかみたちを かむつどへ つどへ たまひ

かむはかり はかり たまひて

わがすめみまの みことは とよあしはらの みづほのくにを

やすくにと たいらけく しろしめせと こと よさし たて まつりき

かく よさし たて まつりし

くになかに あらぶる かみどもをば かむとはしにとはしたまひ

かむはらひに はらひ たまひて こととひし

いわねきねたちくさの かきはをも ことやめて

あめの いわくらはなち あめの やへぐもを いづの ちわきに ちわきて

あまくだし よさし まつりき かく よさし まつりし よもの くなかと

おおやまと ひだかみの くにを やすくにと さだめ まつりて

したつ いわねに みやばしら ふとしき たて

たかまのはらに ちぎ たかしりて